



TITLE:

<批評・紹介> 小柳司氣太著「老莊  
の思想と道教」

AUTHOR(S):

宮川, 尚志

---

CITATION:

宮川, 尚志. <批評・紹介> 小柳司氣太著「老莊の思想と道教」. 東洋史  
研究 1935, 1(2): 143-145

ISSUE DATE:

1935-12-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/138679>

RIGHT:

小柳司氣太著

## 老莊の思想と道教

本書の内容はその題名の示す如く思想としての老莊と宗教たる道教の兩方面に亘つてゐる。即ち第一部「老莊の思想」と、第二部「道教」とである。以下その各部分について簡単な紹介を試みるが、著者が巻頭の總論にお

いて論ぜられた如く、東西兩文明は截然として對立すと雖も終には融合すべきであり、その東洋文明の中心をなす支那文明は古典的―儒教、浪漫的―老莊、神秘的―佛教の三要素からなり、互に輕重を附すべからず、この三思想の盛衰・交錯の史的研究により東洋文化を宣揚せんとせる著者の意圖は本書の隨所に現はれてゐる。

然してその中の老莊學派に就き第一部に述べられる所を見ると、第一編は支那古代思想と題し、漢書藝文志を據點とし、所謂諸子九流の學說を概觀されてゐるが、第二編に特に周代の文化として儒教の禮樂の爲數頁を割かれしは著者の意のある所であらう。第三編「老莊二子の傳及び著書」以下に於いて愈々老莊思想が説明されるが嚴酷な古典批評を避け、現今の「老子」の書は大體老子といふ史上の人物の自作と認定し、又老莊二子の史記の列傳の全文を掲載解説し、第四編「老子の思想」に於て老子第一、二章の註解により、その思想を説明する土臺とされたのは、新奇な方法とは云はれざるも、安全にして且正統的な方法であらう。この部分に限らぬが著者が該博なる知識を以て或ひは西洋哲學や佛理と對照し、或ひは現代社會の卑近な事例を引き、縱横無礙に老莊思想

を論述せられてゐるのは本書が一般初學者の良き津梁となることを期待するに足る。更に第五編「道家の起源」中に於て支那に於ては道といふ概念に理法と實踐との兩者が、西洋に於ける如く分離せず、宗教的色彩の下に渾然と有機的に結合せるは東洋文化の一大特質なりと論ずる等著者の抱負を見るべきである。第六編「晉魏時代の老莊學」に於て老子と周易・佛教・文學・繪畫等との關係を論じ、第七編「老莊思想の波及」に於てその本邦及び西洋文化に對する影響を考ふる等、論述の範圍甚だ多い。第六編に於て老莊思想の時代的變化を研究し、魏晉を界として、孔子の學說等と同様治國の道なりし「黃老」が全然超世的な「老莊」に變化したと述べられてゐるが冀くはこの歴史的な立場を他の部分に於ても今少しく鮮明にされたかつた事である。且著者は言及されなかつた様であるが、魏晉の時多く文獻に見らるゝは「莊老」といふ連稱であり、老莊といふことは寧ろ少い。これは觀念的な莊子の方を當時の清談者流が穩健な老子より尊重愛好した事に因るであらうといふ先人の所説がある。

第二部に移る。著者が特に研鑽せらるゝ所であり、且一般に從來學者の研究が乏しかつた道教に就いて本書に

於ては、第一部に比し述べるゝ所少きは遺憾であるが敘述整然よく道教の概念をうる事が出来る。即ち「道教の起源」「道教の成立」「道教の神學」の三編に分たれ第一編に於てアニミズムの宗教起源説を採用し、古代支那に於ける鬼神崇拜を敘し、鬼神には天神、地祇、人鬼の三種あり、各々の文字學的説明と各々の實例を列擧されてゐる。ついで巫祝及び呪術を論じシャーマニズムに對しても顧みられ、かゝる古代信仰が分化發達して道教に至る迄の經過を述べ陰陽五行説や卜筮や讖緯説や神仙説等秦漢時代の宗教學術について説明されてゐる。

第二編には先づ道教の開創とすべき張陵の五斗米道を論じ、張陵が始めて老子道德經を用ひた理由として「老子」の文章が往々押韻で諷誦し易きこと、老子の思想中の因果應報の道德的要素、社會主義的思想、攝生長壽を説く事等を擧げて居られ、又支那國民性との關係を考へ道教は「その目的は長壽、幸福、富貴を求むるがために道德を行ひ、鬼神を祭祀する者にして一種の現世的功利的宗教」と定義を下されてある。魏伯陽葛洪の學理上の貢獻及當時の三教關係に於ける佛教の刺戟によつて北魏の寇謙之が道教を完成し、社會上の地盤を固めて以後の

記述は簡略の憾あるを免がれぬが、唐宋以後の道教の詳論は本書の分量では要求できないであらう。第三編「道教の神學」に於ては道教に崇拜せらるゝ神及道教の經典を列示せられてゐるが、所謂「道教の神學」の體系的敘述が望ましいと思ふ。但し民衆的の道教聖典たる太上感應篇、陰騭文の全解と功過格の説明は道教教理の一斑を讀者に明らかにするには充分役立つであらう。

以上粗雑な紹介を終るに臨み、東洋文化史上に於て重要にして且興味深く、然も研究の餘地多き道教の分野に於て老莊思想を顧みつゝこれだけの纏つた著述を公刊せられたのは現在及び將來の學界を利する所多きを信ずる。嘗に著者が序せらるゝ如く博士の研究大成の第一歩たるのみならず、今後の研究者のよき指導となるべく、併せて一般東洋文化に關心を持たるゝ人士にとつて好個の參考書となるであらう。卷頭に掲げられた鹿邑縣太清宮、鹿邑縣太清宮並びに道德經碑、燉煌の唐代寫本化胡經、道教家胎息の圖等數葉の寫眞も道教研究の好資料たるを失はぬ。妄言多謝。

(昭和十年十月三日東京關書院刊行、菊判三百九十二頁  
定價金貳圓八拾錢)  
(宮川尙志)